

主体性を伸ばす授業

香月 欣浩 *

Education Aiming at Developing Independence of Mind
—From the Teaching Activities in the Art Class for Early Childhood Education Majors—

Yoshihiro Katsuki

学生たちが主体的に活動していくためには、どうすればいいのだろうか。

そのためにはまず学生たちに考えさせ、それを実行させること。それがどんなに拙いものであるにせよ否定せず、続けるように励ます。

「自信を持った学生たちは次も自分の力で何かを行いたくなる。」そのことが今回、授業と子ども対象イベントを通して強く感じられた。

Key words: 主体性、やる気、好きなもの、企画力、運営力

1 はじめに

今の教育界には「やらされている感」があふれている。教える側の教師はそういう気は毛頭ないのだろうけど、児童・生徒・学生は感じている。

いや、本人達でさえ、それが当たり前になりすぎて気付いていないのかもしれない。

気付くのは社会に出て、自分で物事を決定していく時。

やらされる教育を受けてきた者は、自分の考えで行動することが難しい。指示してもらえれば、ほぼ完璧にこなせるのだが、「あなたの自由にしなさい」と言われると急に戸惑い、動きが止まってしまう。つまり「自分というもの」が育っていないのだ。

世の中に流されていき、人の言うままに行動をしている人間は少なくない。

自分のことは自分で決めて、実行していくということが出来る人間は減ってきていることは間違いない。

2

「することを自分で決められる人になりなさい。」と学校や家庭で大人に言われる子ども達。

大人はそれを求めいているにもかかわらず、実際に子どもが決定する場面になると禁止したり、そのチャンスすら与えないこともある。「～しなさい。」と子ども達に強要し、気に入らなかつたらやり直させる。子ども達はやり直しをする時間がもったいないから初めから質問するようになる。

「～してもいいですか?」「これでいいですか?」自分のことなのに、人にきく体質がだんだん出来上がっていく。そしてそのまま社会へ出て「こちらが言わないと何もできない」とか「指示待ち人間」とレッテルを貼られようになる。

授業時間数が多いこともあるだろうが、学生達は年中疲れているように見える。学生の顔には「やらされている感」が漂い、クラブ活動や自主的活動をする雰囲気はない。

高校を卒業し、せっかく自由度が高まった学生生活に入ったにもかかわらず、魅力的なイベントやチャンスをいかそうとしない。どうしたらいいのだろうか?と思っていた時に、あるイベントを知った。

平成19年度に特色GPに選定された岡崎女子短期大学が行なう「幼児教育祭」だ。

特色GPの説明会でこのイベントに興味を抱き、見学したいと担当の先生に私は願い出た。

すると快く、「遠いですがいつでもいらしてください

* 四條畷学園短期大学 保育学科

い。」と言っていたが、さっそく見学させていただいた。

このイベントは学生達が、保育の授業で学んだ様々な知識と技をいかした手作りのゲームや遊びを使って学内のいたるところにプレイゾーンを作り、地域の子ども達を短大に招くものだった。

このほかにも音楽劇・運動遊びなど多様な表現活動も織り込まれており子ども達にとってはまさにパラダイス。しかも入場無料ということから親御さんにとってもパラダイスであった。

このイベントで企画運営のほとんどを学生自身が行なっているというから驚きである。

そのせいか「やらされている」雰囲気はどの会場からも、ほんの少しも感じられず、逆に学生達が本当にイキイキと楽しそうで、老若男女どんなお客様にも最高の笑顔で接していた。

学生達は実習でも子どもと生で触れ合う機会はあるが、指導教員の指導、成績や評価を気にして本来の自分が出せないことが多い。その点、自分の学校に子ども達を招き、自分達の企画したもので保育するわけだから、学生にとっては誰に遠慮することもなく、実習の成績や評価を気にせず本当の自分で伸び伸びと保育できるのがこの幼児保育祭。子ども達からも人気で来場者数も年々増え続けているという。

3. 「やらされている」から「やりたい」へ

私は本学の学生にも「やらされている」のではなく、楽しみながら自ら進んで実行する体験をしてほしいと思った。

なぜなら、体験から自信を得て、また次にやりたい気持ちを感じることができれば、日頃あまり積極的に参加していない授業も「きっと将来、役に立つ」と考えられるようになるのではないかと、今まで見過ごしてきたことに関心を持って生きていけるようになるのではないかと考えたからである。

4. 「子どもが好き」という気持ち

「本学でも幼児を招いたイベントをしませんか？」学生達は私の提案に乗ってきてくれる予感がしていた。なぜならそれは、彼女達が目指す「保育」のイベントであるからだ。彼女達は心から子どもが好きで、性格やタイプは違えどその一点でみんな共通している。いきなり岡崎女子短期大学のよ

うな大きなイベントは無理だろうけれど、彼女たちの背丈にあったイベントならできると信じていた。信じるところから教育は始まる。

5. 明るい未来とリスク

企画はいいが失敗すると逆宣伝になりかねない。その危険性は十分にあったが、逆に彼女達がヤル気と力を発揮し実行すれば、日頃の勉強を机上の知識にとどめることなく体験から体に吸収していこう。そしてそんな充実した保育イベントができたなら来場してくれた子ども達はきっと満足するであろうし、我が子の喜ぶ姿を見た親御さんは学生のことを評価してくださるだろう。

日頃、地域の方たちと接することも評価されることもほとんどない学生達のことだから「こんなに喜んでくれるのなら、もっと勉強して、もっと子ども達の笑顔を見たい」そう思うに違いない。

私は、逆宣伝になるかもしれないリスクよりも、実行して得ることのできる「明るい未来」に向けて進むことを心に決めた。

6. 学生に押し付けない

私はこの企画を学生達に提案するにあたり、最初から最後まで守ったことがある。

それは「絶対に学生に押し付けない」ということだ。「やらされている」と学生が感じてしまうことは、この企画の失敗を意味する。

やらされて行なう保育イベントなら最初からいいのだ。

自分達から進んで考え、企画し実行する中で、子ども達と触れ合うことが重要なのである。

7. 実践

A. まず1年生の授業中(図工Ⅱ)岡崎女子短期大学で撮ってきた幼児教育祭の画像を学生達に見せた。

「学生達がイキイキしていたこと」「子ども達は幸せそうだったこと」「いたるところに保育で学んだ知識が盛り込まれていたこと」「実習とは違って学生が伸び伸びしていたこと」なども話しながらである。

B. 「もしあなたが、こういうイベントをするならどんな内容を考えますか？」というテーマを投げかけ、1人1人に考えてもらい、アイデアを紙に書いてもらった。

C. 次に4人組になり、個々のアイデアを発表して

もらった。

D. それをまとめて各グループのリーダーに前で発表してもらった。

授業後に今日の授業の感想を書いてもらった。以下、いくつか抜粋したもの。

- ・自分でイベントを考えるのは楽しかったです。
- ・みんなのアイデアを聞くとまた新しい自分のアイデアが出てきて勉強になりました。
- ・意外と企画が頭の中に浮かんできて、おもしろくなりました。
- ・話し合っていくうちにワクワクしてきました。すぐやりたい気持ちになりました。
- ・自分ひとりで考えるよりもみんなで考えて案を出し合った方が想像が膨らみました。
- ・想像したものが実現できたらおもしろいだろうなと思いました。
- ・子どもたちも楽しめ、やっている私たちも楽しめるようにしたいと思いました。

こういうイベントをやるとは、一言も言っていないにもかかわらず、自分達が企画するイベントに意欲的な感想文がほとんどで、否定的な感想文を書いた学生は1人もいなかった。

そこで次の授業で学生達にある提案をすることにした。

8. 話し合うこと

私が学生達に提案したこと。

「もしもみなさんが本当にイベントを実現させたいならチャンスがあります。学祭です。もしもみなさんがヤル気なら可能な企画です。もう1度言っておきますが、これは強制では決してありません。」私は強制ではないということ、したいなら自分達でどんどん進めていくことを前面に押し出しました。それを初めに伝えた上でこのイベントを行なうかどうかクラスごとに話し合わせた。

その結果、どのクラスもやりたいということになり、いよいよ本格的に実現へ向けての話し合いを始めた。

9. 必要な力

このイベントを実現させる上で必要なものがある。企画力・運営力・人間関係力である。

この力は保育現場に行っても必要となる。

全員が同時にこの力を発揮できないにしても、クラス全体の力で3つの力のレベルはどんどん上げていくことができる。個人でみても1人で全部しようとする大変なことでも仲間の力で高まることがある。実際に企画の話し合いでも1人で考えるよりもみんなの意見を聞くとアイデアが深まると感想を書いた学生は多い。会場や衣装を制作する時も、イベントを運営する時も同じことが言えよう。他の人の言動や行動を受け入れることで自分の引き出しが増えていくのもこの企画の魅力だ。発想や意見はなるべく多くのもを出した中から選ぶほうがより高いレベルのものが出来上がって行く。また学生にお互いの意見や発想を発表する機会をたくさん作ってあげることで、自信をつけることができるのではなかろうか。否定されることもあるが打たれ強くなることもこれから社会に出て生きていく上では大切な要素である。

10. 形を変えれば人は変わる

主体性を大切にすることがどんなに大切か。

学生達がどれだけ高い能力を持っているか。

授業を重ね、学生の活動する姿を見るたびに思い知らされた。

4月の入学当初、何でもかんでも質問してきて学生の自主性のなさに困り果てていた私だったが、この授業では誰も私に質問してこない。自分達で何とかしようとする姿勢が見えるのだ。

そして何より学生達が誰かにやらされているわけではないので、みんなイキイキと活動している。

11. 実現する場所

学生達の実現させたい願いを受けてイベントを学祭で行なうことに決定した。

学祭運営委員の計らいで2クラスで1教室を借りることができたことは、学生達の士気を高めることにつながった。自分達の考えたイベントを実現する場所ができたのだから嬉しいはずだ。

2クラス共同、もしくは1クラスずつで出し物をするのかも学生達に話し合わせ決定した。

その上で各グループテーマを決めて出しものを企画していった。

【各クラスの出しもの・テーマ】

1組 「オラ、孫悟空!!」(一緒に冒険してドラ

ゴンボールを集めてくれ)

2組「プラネタリウムと折り紙」

3組「ジャングルをぬけろ!!」(動物達のいる迷路ジャングル。クイズに答えゴールを目指そう。)

4組「動物のパン屋さん」(みんなで小麦粉粘土を作ろう)

5・6組「白雪姫をすくえ!!」(ゲームをクリアして白雪姫を救いだそう。)

6週間をかけて準備を行ない。時間のたりないクラスは空き時間にも美術室に訪れ制作を続けていた。当日楽しみにやって来る子ども達の笑顔を想像して学生達のヤル気が日に日に盛り上がっていくのが伝わってくる。いよいよ1週間前に近隣の幼稚園・保育所にイベントのチラシを配布してもらえるようお願いに行った。初めての試みなのでチラシを配布していただくにあたり、このイベントのねらいや主旨を園長先生に直接お会いしてお伝えする必要があった。

<ねらい>

- ① 学生のヤル気を主体的な活動によって喚起させる。
- ② 自分達の企画したイベントの中で子ども達と生のふれあいをする。
- ③ 自分で考え行動することを身につける。

<主旨>

保育学科がある短期大だから学祭で学生達の考えた子ども対象のイベントを行ない、近隣の子ども達を招き、楽しんでもらう。

どの園長先生もとてもいい企画だという評価をくださった。

新卒の学生は言われたことはうまくこなすが、自分で考えて仕事をするのが苦手らしい。だからこういう学生が主体になって行なう授業やイベントをもっと増やして欲しいと考えておられたようだ。

12. 広報

イベントには「ワクワク子どもランド」という名前をつけポスターを外部にも貼り、広報活動も積極的に行なった。これだけの時間をかけて頑張ってきた学生達。当日、子ども達が1人も来なかった場合を考えると、ヤル気を喚起するための授業とイベントだったものが、逆にヤル気を失うこと

になる。集客は学生の意欲維持のためにも、イベントを続けていくためにも最も力を入れて行なった。

配布したチラシ・ポスターの記載内容

■日時 2008年11月8日 13時～15時まで

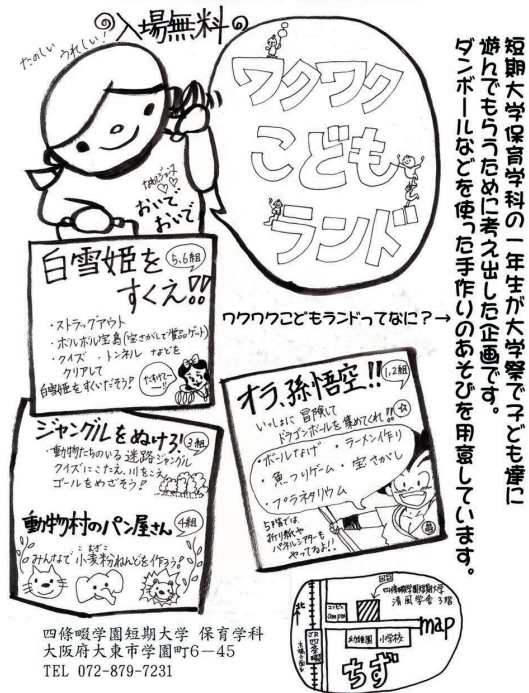
■場所 四條畷学園短期大学 清風学舎3階

■入場無料

■保育学科1年生の企画したイベント第1弾

♪日時♪ 2008年11月8日(土) 13時から15時

♪会場♪ 四條畷学園短期大学 清風学舎3階



13. 教員の役割

学生主体とはいうものの、牽引していくのはやはり教員だ。

学生自身が自ら考え、実践していくようにもっていき、その気にさせる。それが教員の役割である。伝えたいことがあれば私からクラスのリーダーへ伝え、リーダーから学生たちへ指示をするようにした。その方が「やらされている感」がでない。ただし私の口から直接、学生達に言ったことがある。

- ① こどもの安全を第一に考えること
 - ② やるからには遊びではない。イベントに際し保育者としての自覚を持つこと。
 - ③ お客様への言葉づかい・対応を考えること。
- この3つは学生にどうしても意識しておいて欲しかった。

14. 本番当日

当日はのべ300名の来場者があり、学生達は2時間、休憩なしのイベント運営となった。

子ども達はもちろん、その笑顔に励まされ学生達もイキイキとして活動していた。

以下の親御さんの感想文からも満足していただけたことは伝わってくる。

- ・お姉ちゃんに相手をしてもらって、子ども達の楽しそうな姿を見られて嬉しく思いました。
- ・アイデアがすごくユニークで楽しめました。
- ・学生さんの手作り感がよく、楽しめました。

・上手に手遊びを使い、子どもが待ち時間に飽きないようにしてくれて良かったです。

- ・このようなイベントは初めてで楽しかったです。
- ・子ども向けで色々と一生懸命考えてくれていて、その努力がすごくよく分かりました。
- ・どれも楽しかったです。将来の先生が楽しみです。

15. 学生のアンケート結果

事後調査

イベント終了後、学生達にアンケートを書いてもらった。

ワクワクこどもランド2008 アンケート結果

1、当日やってみてどうでしたか

大変よかった	よかった	まあまあ	おもしろくない	嫌だった
64名	13名	0名	0名	1名

2、またやってみたいですか？

はい	いいえ
75名	3名

3、自ら行なう企画、運営の授業はどうでしたか？

大変よかった	よかった	まあまあ	おもしろくない	嫌だった
42名	32名	4名	0名	0名

質問事項	大変よかった	よかった	まあまあ	おもしろくない	嫌だった
①こどもや大人たちと関わることで自己の存在感や充実感を味わえた	28名	36名	11名	3名	0名
②積極的に様々な活動に取り組むことができた	25名	36名	17名	0名	0名
③自らが周囲に働きかけることができた	16名	30名	29名	3名	0名
④思考錯誤しながら、自分の力で行なうことの充実感を味わえた	24名	29名	22名	3名	0名
⑤人と関わることの楽しさや大切さを味わえた	49名	16名	12名	1名	0名
⑥言葉遣いや態度に気がつけた	39名	25名	12名	0名	2名
⑦伝え合い共感し合うことなどを経験できた	33名	30名	14名	1名	0名
⑧ものを大切にする気持ち、公共心を意識できた	33名	30名	14名	1名	0名
⑨数や量、長さなどを考えることができた	18名	30名	25名	4名	1名
⑩自分の感情や考えを伝えることができた	18名	38名	18名	3名	1名
⑪自ら様々な表現を楽しみ、意欲を持って楽しんだ	32名	26名	18名	2名	0名
⑫こどもの様々な面を見ることができた	46名	24名	8名	0名	0名
⑬材料や道具の知識が増えた	34名	28名	13名	2名	1名

- ・このイベントをしてよかったと思う?…よかった・大変良かった 98.7%
- ・またやってみたいですか…はい 96.1%
- ・自ら行なう企画・運営の授業はどうでしたか?…よかった・大変よかった 94.8%

アンケートで、この企画イベントを行なってよかったと90パーセント以上の学生が答えている。

このことから分かるように学生達は企画・準備・運営する上では色々問題にぶつかり苦戦している場面もいくつもあったようだが、それぞれが何らかの満足感を味わっていたようだ。

大変だったにもかかわらず、「またやってみたい」に96.1%もの学生が答えたことから、もっと学びたい、もっと経験したいという意欲がうかがえる。これが本当の勉強である。

13の質問事項の中でも大変よかった・よかったと感じた学生が多かった項目を見ていくことにする。1番多かったのは89.7%で「子どもの様々な面を見ることができた」であった。

学生達はこのイベントで実習とは違った子どもの一面が見えたに違いない。子どもは正直であるからおもしろくない時は正直に遠慮なく言うてくるし、嬉しい時は表情に思い切り出る。それを感じ取りながら自分達の用意したゲームやプレゼントのデザインやサイズ、数、待ち時間などを、その時々で反省したことだろう。それだけではなく、上手な言葉かけひとつで、子ども達がヤル気になることも感じたに違いない。また子ども達と触れ合える経験が多いほど多種多様な対応が幅広く行なえることを体感し学んでいたはずである。

83%「人と関わることの楽しさや大切さを味わえた」

ここでいう人と関わるとは、学生同士のこと、来場した子どもや大人のどちらもである。

授業で自分の考えを発表して聞いてもらったこと、話し合ったこと、準備したこと、助け合ったことなどを通して個々が何らかのことを学んでいたはずだ。また来場者からもらう笑顔やありがとうのお礼の言葉は学生達に「人っていいな」「自分を認められた」と感じさせたことだろう。人と関わることでエネルギーをもらうことを認識したに違いない。

82%「言葉遣いや態度に気がつけた」

学生の言葉遣いは入学当初に比べるとずいぶん良くなったとはいうものの、友達同士の会話ではかなり注意することがある。そのことから当日のことを大変心配していた。言葉は人である。言葉にその人の人格が出ると言っても過言ではない。いくらい企画をして、いいものを作って、いいイベントをしても来場者の評価は、やはり人間対人間の関わりである。その中の重要な要素が言葉遣いであり声色、表情（笑顔）、立ち居振る舞いである。

イベントを通してその重要性を感じてくれたことは本当に意味があったと考える。

82%「こどもや大人たちと関わることで自己の存在感や充実感を味わえた」

自分もやればできる、人を喜ばせることができると感じることは、自信につながる。次に何かを挑戦してみようとする勇気を得ることでもある。こういう機会が多いほど人は成長できるし、やる気も増えていく。もっともっと人と関わって行って欲しいものだ。

82%「材料や道具の知識が増えた」

実際にイベントに必要なものを制作して行く中で材料の特性を知り、道具の使い方を学んでいく。必要なものを必要に応じて取捨選択していく。授業のように用意された課題でなく自分の作りたい制作の中でその力が試されることは理想的だ。楽しいのに学んでいる訳だから最高である。

16. さいごに

やはり人は教え込まれるよりもまず「自ら学ぶ姿勢が大切」だと考えます。

やらされるより自分からやりたいと思ってする方が楽しいし、能率も上がり、自分の中に残るものも多いと思います。

そして何より自信がつかます。この自信は次の挑戦へ向かう時の勇気となります。

この経験を短大生活の中で多く積み重ねることで、積極的に授業を受けて欲しいと思います。

自分の人生を積極的に築き上げていく人間になって欲しい。

そして今回、自分が体験した主体的な活動を今度

は子ども達にさせてあげられような、そんな保育者になってほしい。
そう考えます。

注) 文中に記載したアンケート質問項目は岡崎女子短期大学で作成されたものを、許可を得てそのまま使用させていただきました。

－ 2009. 1. 30 受稿、2009. 1. 31 受理－